

浄土

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別投承認雜誌) 第三五二号
昭和四十六年三月二十五日印刷 昭和四十六年四月一日発行



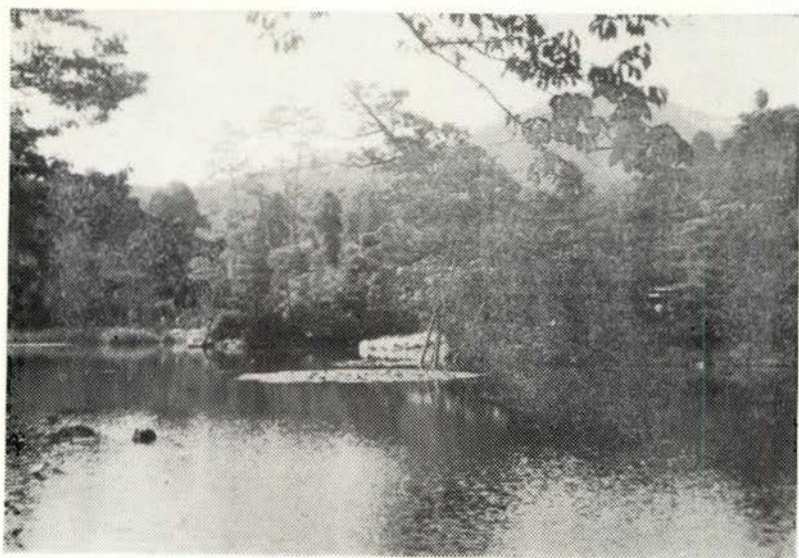
第三十七卷

第四号

1971

4

四 月 号



一 目 次

表紙「仏」松涛達文画

人生絵巻	宮 本 文 哲	(2)
現代仏教絵画の可能性	鬼 原 素 俊	(4)
仏像のこころ	浦 崎 芳 夫	(7)
私の念仏生活	森 妙 證	(10)
昭和法然上人伝(4) 三帝の戒師・熊谷直実の発心		(14)
インドでの旅日記(9)	佐 藤 治 子	(16)
新刊紹介『選択集に聞く』	正 本 乗 光	(22)
ふる里紀行 念仏村のののさまの死	川 端 大 祐	(24)
「道」 二尊院への道	高 橋 良 和	(29)
法然上人の御影像をたずねて④		(32)

語和声念



三島葬儀と浄土往生

「露の身はここかしこに消ゆるとも、心は同じはなのうてなに」は浄土念佛者の心意気を表現したものである。人それぞれに、いつどこに死するとも、すべては等しく浄土に生れたいというのである。去る一月二十四日に、築地本願寺で、三島由紀夫氏の葬儀が、七千人の会葬者で行われた。曹洞宗式で、川端康成氏を委員長としてなされ、武田泰淳氏が文壇代表として弔文を捧げた。その日は、たま泰淳氏の母堂大島つる子さん（故大島泰信師夫人・故渡辺海旭師令妹）の密葬の日でもあった。

三島論争の未だ消えやらぬ折柄、左派右派その他思想的なけはいの渦巻く中で、盛大な装いを呈しつつ進められた。「弔文の如何では、どんな異変も」と案ぜられていた。友人代表の舟橋聖一氏の弔辞が終って、泰淳氏が立った。特異の思想家とも考えられているこの人に、左翼人も右翼人も、かたずをのんだ。週刊紙の記事によると、彼れ元来は浄土僧、茶色の法衣に如法衣、袴の下は靴、蓬髪、あごひげ、怪異の形相に、一瞬驚きのさわめきとそれにつづく静寂があった。名作「異形の者」の作者泰淳君は異形の姿で「露の身は」を歌い上げ、「如来の光明は……一切の衆生を救って捨て給わず」と唱えて、おもむろに、「三島さんは何と思われようとも、私としては三界万霊と俱に往生して下さい」と言って高声に南無阿弥陀仏を三唱して終った。一般人に判ったかどうか。三界万霊とあっては、右も左も秀才も凡人も「共々に」である。三島氏も一人だけの、秀才の成仏でなく、愚人と共に往生して貰いたいという願ひである。「此際は、聖道門流のエリートの成仏では困る。一切が救われる極楽往生しかない。法然上人は偉い。法衣の功德も大きかった」とは泰淳の述懐。この二週後に、大島つる子さんの本葬が、東京目黒の長泉院であった。当日の御導師の終りも、泰淳氏の弔辞と同一であったのも奇しく、この葬儀に参列された三島夫人も感を新たにされたのではなからうか。（佐藤密雄）



人生絵巻

宮本文哲

(大本山善導寺法主)

或人曰く、「人生は一幅の絵巻物である。人は絵師として毎日この絵巻物に、善・悪・無記、何れにせよ絵筆を下さねばならぬ」

また曰く、「人の心は巧なる絵師の如し、一切の法として描かざる事なし」と。

扱て巧なる絵師の書いた絵巻を展げて見ると、たまには仏らしいものを描いてはいるが、大方は鬼である。

「傀儡師首にかけた人形箱、仏出そうか鬼を出そうか」で、そのいずれを出すも「一切唯心造」と己が心のままである。仮であるなら仏を出せばよいものを、鬼のみ出しておる

とは、全くなさけないことである。なさけないと知ったら、仏を描くように心がければよいものを、それが中々できないのが、三毒五慾にまみれた吾等凡夫の宿業である。仏さまは「凡夫罪障垢穢の身は百千万劫を経て洗えども清めがたし」となげかれた。しかしこの清めがたい垢穢の身も、「唯礼拝清浄の水(念仏)のみあって、衆生罪業の垢を洗う可し」と仏の大慈大悲のご誓願をお示しになってある。私ども凡夫は、このありがたい仏のご本願に気づかせて頂く時、念仏衆生摂取不捨の光明を蒙って、自然に仏を出し、仏を書くことができるようにして頂くのではあるまいか。

浄土宗の安心は、一者至誠心、二者深心、三者回向発願心

である。この三心の中、最も大切なのは深心である。深心は更に、信機、信法の二法に分かれる。信機とは、我身を省みて下根下劣の凡夫とへり下るのである。前記の凡夫罪障垢穢の身と反省するのである。法然上人は一枚起請文に「念仏を信ぜん人は、たとい一代の法をよくよく学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらに同じうして、智者のふるまいをせずして」と、お示し下されたのである。而してその信法とは、こんな罪障垢穢の身は仏の本願にすぎると、救われる道はないと、一心専念にお念仏させて頂くのである。御遺訓に「ただ一向に念仏すべし」と、お示し下されたのである。

私はある宗乗学者から浄土宗の別名を「還愚宗」と教わったのであるが、信機信法の上から見て、正に穿ち得て妙なりと了解した。それは御遺訓はいうまでもなく、法然上人の常に仰せられけるおことばに「吾はこれ烏帽子を着ざる男なり、十惡の法然房、愚痴の法然房が念仏して往生せんとは」と、ひたすら信の一途に固って、日に六万遍のお念仏を相続され、この信心によって「生けらば念仏の功積り、死なば浄土に乗りなん、とてもかくてもこの身には、思い煩う事ぞなし、と思ひぬれば生死共に煩いなし」と、生死解脱の妙境に

達せられたのである。

知恵第一の法然上人が、愚痴に還つて一文不知の尼入道となり、ただ一向に念仏されたのである。還愚宗の別名ある以所、またむべなるかな。

これに因んだ思い出が、私がまだホノルル浄土宗別院に在職中であつた。ある日の夕方、私は勤行のため夕暗せまる階上の本堂に上つた。見ると一人の老婆がひざまずいている。老婆は私の行ったことにも気づかず、静かに合掌して何か独言をいつている。聞くとはなしに聞くと、

「私のような聞けば聞きそこない、いえないそこなう愚か者でも、如来さまにおすがりすればお助け頂くのである。なんというありがたいご本願だろう、もったいないもったいない南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」。

と、一心に拝んでいる老婆の姿は、実に神々しいものであつた。私は如来さまに総てを任せきつた、この老婆の信心こそ、還愚宗即ち浄土宗の真面目である、と思つた。

わが浄土宗は、来る昭和四十九年には、浄土宗開宗八百年記念慶讃大法要を厳修して、仏祖の法恩に感謝しなければならぬ。私はその心がまえの第一は、唯一向に念仏して、人生絵巻に筆を下ろさして頂くことだと信じている。合掌



現代仏教絵画の可能性

鬼原素俊

(新興美術院創立会員
学士会名誉会員)

日本文化や歴史を語る時仏教を離れて説くことはできない。仏教が浸透したところから今日に至るまで、日本人の生活には従来からの神道と仏教はずっと共存してきたのである。六世紀の頃大陸からの新しい宗教の魅力は今日の吾々の想像以上のものであったろう。

仏教の到来によって、日本文化は開花展開したので、仏教芸術も仏に対する強い信仰から生れたものと思われる。

日本の仏教芸術は実にすばらしい。日本文化の大きな柱となっていることはだれもが否定できない世界にほこりうる立派な芸術である。しかし今日吾々はここですこし考えて見る

必要があるように思う。過去に於ける立派に完成された芸術も到来当時のあの神秘的な力強さや、迫力を現代作家の作品にも持ちつづけているであらうか。初期の作品ほどすぐれ強い感銘を受ける。初めて出合った仏教芸術のすばらしさ、新しいものへのおどろきと感激、そこに強い信仰が生れたのであらう。

仏教の奥深い思想性の中に無限の創造性があつたのである。そして強い信仰にささえられて立派に完成されるに至ったのである。ものが完成すると可能性がなくなり形式が生れる。近代の仏教芸術は長い間に完成された伝統の中の形式だ



＜仏＞

けが受けつがれているように思えるのである。

このことは仏教の布教の面からも信仰の有りかたにも問題があり、今日多くの芸術遺産や寺院の経営にも色々問題は多いと思う。

現代科学文明の世相の現状がはたして仏教の理想であろうか。表面華やかな社会も利他的で、自己中心的な幸福ばかりを追求する現世りやくの宗教がさかんな今日、一見平和なようであるが、本当の人間の幸福な社会へ向っての実現が可能であろうか。既成宗教や新興宗教に現代に於る真の信仰があるのか。ごく少数の例外をのぞいては今日の社会生活からは縁遠いものとなっているのではなからうか。

仏教芸術を今日の時限に於いて語る時、まえに述べた以外の多くの問題に出会うのである。幸に仏教には尊厳な宇宙間の法則や真理を説いた、無現の可能性を秘めた真理がある。

仏教布教が必要性に應じることもひとつようであるが、それより大切なことは作家自身の独自の創作でなくてはならない。云いかえれば作家自身が仏教の中の宗教観を体得して強い信仰の上に立って作品にあたらなければ、とうてい立派な良い作品は生れないと考えるのである。

一口に仏教芸術と云っても色々ある。ここでは主として仏



《文珠菩薩と竜女》

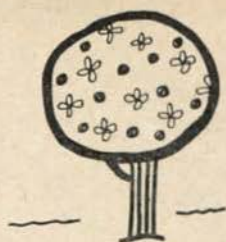
教絵画について述べたので、近代の作家が現実をありのまま写す、いわゆる写実的作品の場合、そこに表現上の制約を必要とするようなことはない。たとえばある人物の肖像画が描かれる場合、像主の特別の依頼でもない限りその人物に特定の表現形式があるはずがない。

近代絵画が宗教性から脱皮して自由な表現を享受したことは周知の事実であらう。

ところがいわゆる仏画と云う場合にはいささか様子がちがうのである。多くの場合宗教画の主人公は遠い過去の人物であり、現に存在しない想像上の人物であることが多かったのだ、表現するに際して何か特定の持物や目じるしをもって標識としなければならない。

たとえば頭には螺髪、身には衲衣の質実な形姿が如来の特徴であるのに対して、頭には宝冠、身には璎珞等を帯ずるのが菩薩であるなどのごとく規定がなされている。このような公約数的標識こそ仏教芸術に於る伝承性であり、そこに技術的にも形式が生れる要素があるのである。

長い間この国につづいた立派な伝統の良い面を現代にいかすことを、吾々は強く自覚しなければならぬと念願するのである。



浦崎 芳夫

(横浜市南区在住)

仏像のこころ

一
仏教において、「法」を聞くということは大切なことである。お説教を聞くということは、仏教にふれてゆく根本的な態度である。み教えを聞くということは、一般的には、相手の語る言葉を聞くのであって、声というものが、像となって、相手の説く心をこちら側へ受けとることになるのである。

ところで、仏教では、もうひとつ、音や声でなく、形を通して、み仏のみ教えを聞くということが説かれている。形というものには、音も声もない。しからば、どうして聞くことができるかというと、その形というものには、ある心、精神をあらわしているものであるから、その形を縁として、その心聞くのであるということがいわれるのである。これは、大変意味の深いことである。

このことは、あなたがち仏教にかぎらず、一般の生活においてもいうことができると思う。病いの床にある子供が、寝もやらず枕もとに座って看護している母が、手を合せて、子供の快復を念じている姿をみると、子供の心に、母の心がいたくつたわるのである。母の合掌している形、姿から、母の心を感じることができるのである。ここに、形から聞くということができるのである。

仏教の美術をみると、とくにこのことが大切である。仏教の美術は、形のない真理、私たちの生き方が、美しい形によってあらわされているのである。これを、美術の心といってもいいのである。その心を自分の生きる態度、歩み方として受けとり聞くのである。ここに、その形の美しさというものが、その使命をはたすことになるのである。

今日の仏教のあゆみ方のひとつは、その美しい造形を通して、その真理を、人々の生活のなかに浸透してゆくことの大切さであろう。一般の人々の側においては、今日までの仏教に対する批判と潜入観念をすてて、仏教のもっている美しい造形を通して、今日を生きる心構えを聞き、汲みとることにつとめるべきではなからうか。

二

日本の家庭には、仏壇というものが祠られている。家に仏壇があるということは、その家庭の人びとが、仏教の説き示す真理を身につけ、その精神生活を深めてゆくためである。

亡き人びとのみ霊をまつり、追善のまごころを捧げるとともに、もうひとつ大事なことは、仏法を身につけ、その生活を深めるためのものとして、取扱われねばならないのである。

最近、ある家庭で息子の別居のために新築した家に両親が「仏壇を安置するように」といったら、「せっかく新しい家に、仏壇のような抹香くさい、縁起のわるいものはこまる」といわれたと、信仰厚い父が慨嘆していたのを聞いたことがある。今日の多くの若い人びとは、案外、このような認識であらうと思われるが、私達は、精神生活を深めていくために、仏壇の本来の意義を充分認識して、形を通して、心を養

つていくことに気づかなくてはならない。

日本には沢山の仏像があり、長い歴史のなかで、仏像を拝むかたちを通して、真実の心にふれてきたものである。

たとえば有名な奈良の法華堂は、三月堂とよばれており、本尊は、天平時代そのまゝの美を現在に伝えている、不空羂索観音である。その頭上の冠に阿弥陀仏を頂戴し、合掌を胸にあてて立ておられるお姿は、単なる美的観賞の対象ではなく、今日、私たちが生きてゆく構えを照示しているような気がする。頂戴とは、頭にいただくということである。

日常生活のなかで、私たちも「頂戴します」という言葉を用いる。頂戴とは、相手の心をいただき、感謝のまごころをささげることを意味するのである。不空羂索観音が、冠に阿弥陀仏像をいただいているのは、阿弥陀仏の心を、自分の心としてゆくすがたを象徴したものである。胸にあてた静かな合掌は、われよりも高きみ仏の心を受けとり、それをよりどころとして生きることを示すものである。天平の古きお堂のなかにも、今日に生きる日本人の大切な生き方を示しているのである。

三

よく走ることを形容して、韋駄天のようだという。よこし

まなるものを打ち砕く金剛杵を合掌の手に捧持して、疾走する形に作られているこの像には、今日の私たちに聞くべきひとつの生活態度が示されている。

仏教の經典は、人間の、心の暗が破れ、明るく、美しく生きる道が説かれている。このことは、暗をこのみ、人間を罪惡にさそう惡魔にとつては、何とか処置しなければならぬ重大なことである。そこで、一人の惡魔が、經藏に忍びこんで、經卷を盗んで逃走したのであるが、韋駄天の発見するところとなり、ここに逃げるものと、追うものとの、すさまじい狀況が展開されたのであるが、駆けるに妙をえた惡魔も、韋駄天の足にかなわず、ついにつかまり、經卷は無事かえたのである。

これは韋駄天に関するものがたりであるが、今日を生きる私たちにひとつの現実的心構えを指示するのである。これは真理を護持する心をおしえるのである。

自分のことをしんけんに考えねば生きてゆけない現実の中に、常にこの道を把持して、これを護り、そのためには、走りまわる心、韋駄天の心を、あらゆる生活の場において実践する必要がある。

それとともに、ものを受けることのできるのは、みんなの

走りまわったお蔭によるのであることをよくよく認識することが大事であり、韋駄天の心に感謝の真心を味得すべきである。

四

今日の私たちに欠けているのは、真理を仰ぐころではないであろうか。自分の価値をみとめ、自力の力を信ずることは勿論大切であるが、その価値と力を、自分以外の人びとに及ぼす心を、もっともっと養う必要があると思う。仏教の無我とは、形から養われ、やがて形を越えて、心の奥深く広がってゆくものである。小さな心が、広い豊かな心に無限に展開してゆくのが無我である。

私たちが、仏像をただ単に美しいとみるだけでは、本当のうけとり方ではない。中宮寺の如意輪觀音の、右の手を静かに頬につけた思惟のすがたの美しさを通して、そこに、私たち人類の幸福と平和をねがっておられる心が、みる自分の心にひしひしと感じられるとき、形ある仏像が、心のなかによびかけてきたことになるのである。

仏像は、美しい形から、心を育てる拝む態度にまで深められていくものである。



私の

念仏生活

森 妙 證

(比叡山西塔元黒谷青竜寺)
知恩院修練道場内

私は加賀市の真宗の家に生れた。父は幼ない時に両親に死別した関係か、非常に念仏信者であったのです。同時に母も、とても信仰の深い母でした。父はどんなに忙しくとも、つかれていても、朝晩二度は必ず正信偈と阿弥陀経を拝読されたものです。朝晩の勤行には、家族全員が父の後に参つていないと叱られるので、私は「学校の勉強ができないなあ」と思いながら、七八歳の頃ですから別にありたいとも思わず、勤行がとても長く考じたものです。

けれども毎朝晩、阿弥陀経を聞きましたので、まだ字も読めないうちに、自然に覚えてしまいました。お経を覚えると、只何となくありがたくて、妹のお守りをしながら、二キロあるお寺のお説教によく参りました。お説

教のことばの中にわからないところがあると、直ぐ布教師さまの部屋へ行つて、子供ながらもわかるまで聞かせて頂いたものです。

その中で今でも一番印象に残っておりますのは「超世の悲願を聞きしより、吾等は生死の凡夫かは、有漏の穢身はかわらねど、心は浄土に住みあそぶ」という文句です。十一歳の私には、超世の悲願とは何のことか、有漏の穢身とはどんな意味なのか、不思議でならず、早速部屋へ聞きに行つたものです。そしてわかつたことを、また大人の参詣者に教えてあげたりしたのです。

今、子供の頃のことをふりかえってみると、随分変つ

ていたように思い出すのです。このようにして姉に生れた私は、妹のお守りをしながら、お説教参りを続けていたのです。

ある日のことでした。妹が着物をよごしたので、十一歳の私がそれを洗い、紫色になった石ケン水を庭先きへ捨てたのです。ところがそこへ父が帰って来、「庭先きへこんなきない水を捨てた者は誰だ」と、非常に叱られました。「毎日お説教を聞きに行つて、何を聞いてくるのか、お説教参りする者の行いか、お寺参りするのなら、するらしい行いをせよ」ともいわれました。私は何もいわず、只しょんぼりとするのみ、それから私は自分に、とてもきびしくなつていったのです。

私の部落の中央には大きな川が両方にあり、石橋がかつていたのですが、私はある時夢を見ました。

年頃七十五六歳のやせおとろえた目くらのお婆さんが、杖をたよりに橋を渡って行くのです。渡り終ると杖で探りながら、川岸の方へ行きかけました。私は「あっお婆さん危ない川へおちる」と、いざまだきかかえた

と同時に目が覚めたのです。その時私は、常日頃お説教を聞かせて頂いていたからでしょうか、覚めた時子供ながらにも、今夢に見たお婆さんのように、ああこの世は一寸先きのこともわからない暗やみ、本当に目くら同様である、お念仏申して仏さまにおすがりしなければ、何時死ぬかもわからないと心に思つたのです。

そうしたことがあつてから、私はおてつぎのお寺の住職さまに尼僧になりたいと相談いたしました。しかし、それは不賛成であると、京都の真宗の養蓮寺というお寺へお世話下さつたのです。その時私は有髪の布教師になりたいと思つていました。

ある日、東本願寺の総会所へお参りました。お説教が終えたあと、御拝口を出て、何気なく後を振り向くと、年頃五十歳位のとても美しい女の人が出てまいりました。そして私に一尺四方程の大きな風呂敷包みをつ渡し、「あなたは御仏縁のある方だからこれをさしあげます」と告げたのです。田舎から出て来た私のこと故、正直にありますがとうございませと、頂いてお寺へ持ち帰り

ました。そして奥様に渡そうとしたところ、「知らない人からそんなものをもらってはだめだから、返しておいで」と申されました。そこですぐに総会所へ返しに行きましたが、「そんな女の人一度も参ったことがないし、知りません」といわれるのです。仕方なく持ち帰り、中を見ますと、白衣一枚と白帯一本が入っていたのです。

それから私は幾程かして、田舎の家へ帰りました。そしてある日のこと、尼僧になりたいと父にいったところ、父はもとより念仏信者でありましたので、直ぐに許されたのです。その時の父は、「出家するなら、出家らしい行いが伴わなければだめだ、剃髪しただけが尼僧ではない、尼僧になって仏に仕えるなら在家以上の起行が伴って、仏の道に生きることだ」とさとされました。それから私は自分の行いにきびしさがなければ、魂のないお念仏と同じだと自分にいい聞かせ、十九歳にして正式に仏門（尼僧）に入りました。

それより後は、確かに苦難の道の連続でした。その道を歩みながら五ヶ年の学業を卒えさせて頂いたことは、お念仏に生かされて頂く私として、苦難の中にも正に楽しいありがたい過去でもありました。このような過程をたどりつつ、今また浄土念仏発祥の聖地で、有縁の参詣者と法談し、宗祖法然上人さまにお給仕させて頂くご縁にめぐりおわせて頂いたことは、私の限りなき喜びでございます。

上人さまの八百有余年前の御苦行時代は、熊笹の葉を乾かして、現在の綿の代用にして、布団や着物の中に入れて暖を取られたとのこと。更に食事は米粒少々に草をきざんで、たいたものを常食として召しあがられたとのこと。それもそのはず、現在の今の世でさえも何を買うも、買うところのない僻地、御苦行当時は、道もけわしければ、山もけわしい、食料にも不足することの想像は、手に取る如く推察するに余りあるものであります。それにもまして、零下五度六度の寒冷にも堪え忍び、すべての苦難をのり越えての浄土御開宗、何ともつたないことではないでしょうか。

私はこうした思いにふける時、更に阿弥陀仏の五劫兆歳永行の御修行、釈尊の王位を捨てられての八十ヶ年の御苦勞、ならびに歴代の高僧方の超人間的な御修行など、一切世間の方々のお蔭さまの中に、今日一日一日を生かさせて頂いていることを思う時、私はまず五体そつた人なみの体に育てて頂いた、今は亡き両親の御恩をしみじみとありがたく思うのです。もしも不具者であつたならば、この聖地にてご奉仕させて頂くご縁にも会うことができなかったであらうことを思う時、名も知らぬ路端の小草にも、合掌せずにはいられません。

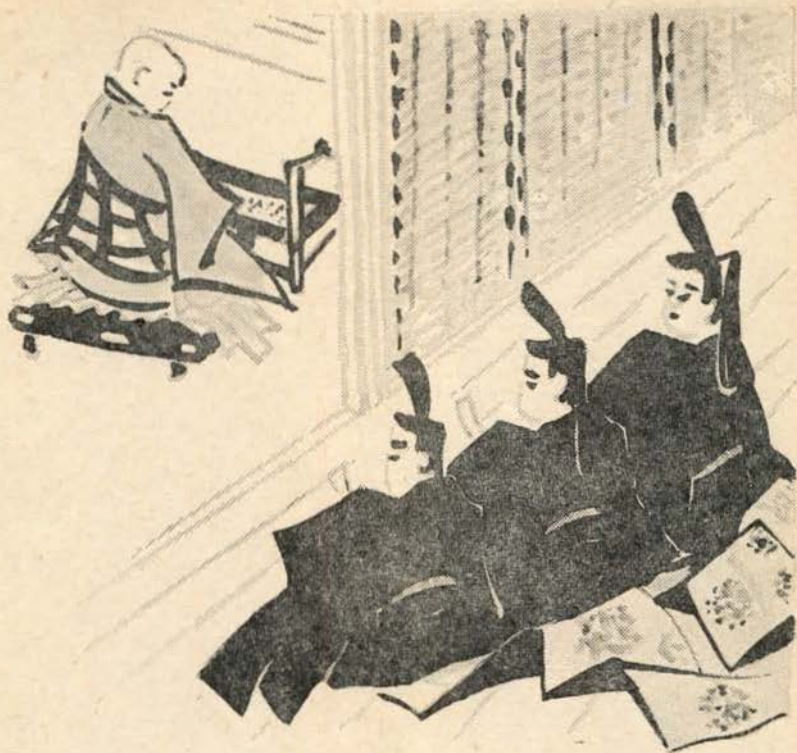
そして、法然上人を慕つてご参詣して頂く方々を、私は仏さまのように思えてなりません。それはついでに参つて来るという場所ではないからです。上人隠遁の元黒谷は、字の如く人里はなれた閑静な地で、わざわざ心をこめてご参詣になられる方ばかりであるからです。不便なところであるが故に、心の底から祖師を偲んで参つてくださるからです。私自身も、不便なところであるが故に、無限に祖恩を偲んでありがたいのです。

往復一時間を用して通信物を釈迦堂まで頂きに行く時の私の心は、一歩一歩ふみしめての上り下りのありがたさは、決してことばかりのものではありません。何故ならば上人さまの御教えは、お念仏の申する処は予が遺跡と仰せられ、更にお念仏称える者には、弥陀観音勢至さまはじめ一切の御仏さまが、影の形にそうごとく御守護して頂いているからです。この聖地をふみしめて歩く時のありがたさは、只知る者だけが知る喜びでございます。「子供を持つて知る親の恩」の如く、自分が苦勞してみ、初めて他人の苦勞がわかるのです。

祖師の御苦勞を偲ぶ時、只すべてがもったいなく、感謝にたえません。つまづく道端の石ころにも頭の下がる、今日この頃でございます。

この尊いお念仏を通して、それぞれの分に応じてお念仏の灯をかがげ、世の光りとなるよう、祖恩に報いたいものと念じております。

今は早や 六字の御手に 救われて
心のまゝに ならぬ 身の嬉しさ



三帝の戒師⁽⁷⁾

後白河法皇は、法然上人を召されて『往生要集』の講義を聞かれたとき、信仰のあまり藤原隆信^{たかののぶ}に命じて上人の肖像を写させ、建久三年（一一九三）ご臨終のときには善知識に召されたという。後鳥羽上皇は隠岐^{おき}の行宮で浄土三部經を読み、阿弥陀三尊を安置した厨子^しには観經を書かれて日夜礼拝をされたという。この時代の貴族が、死後に極楽浄土をねがったことはいまでもないが、諸伝記によると、一介の平僧で通した法然上人は皇室に召され、後白河・高倉・後鳥羽の三帝に授戒をされたと伝えられている。



熊谷直実の発心(ほっしん)⁽⁸⁾

寿永二年(一一八三)平氏は京都を捨てて西走し、西海で陣容を立て直したが、翌年二月、源義経・範頼の軍に攻撃されて完敗し、ふたたび東上することはできなかった。このとき無官の大夫平敦盛が関東の荒武者熊谷直実に討たれたのは有名で、涙をさそる一件である。建久三年(一一九二)永長の合戦で無常を感じた直実は、噂に高い法然上人のもとをたずねて解脱の道を求めた。罪の軽重を問わず、ただ念仏さえ申せば往生することができるとさとされた直実は泣いてよろこび、入道して蓮生と号し、熱心な念仏者となった。

松濤 達文画

玉山成元 文

インドでの旅日記

アジャンタの洞窟



第九回



デカン高原のパザールで

佐藤治子

ボンベイ

二月二十八日。アラビア海に臨むボンベイは、ヨーロッパからインドへ入る西の門でもある。空港にはパンアメリカンやBOACの大きなジェット機が機体を休めている。走り出した車は沼くさい地帯を抜け、市中へと向う。貿易港だけあって、立並ぶビル街は商業都市らしく活気を呈している。一番ヨーロッパの影響が強いただけあって、歩いている女の人達

や制服の女の子達もあけぬけている。一泊するホテルは、ものすごくしゃれた建物のタジマールホテル。ヨーロッパから大きな客船が入ったといって、私達の部屋は不足してしまっている。ロビーや通路はアメリカ人らしい婦人達が往き来している。港を一望に望める食堂もヨーロッパ化しているし、おっとりとした落付きのあったラクノーのホテルと何という違いだろう。

午後からは街を見物に、買物に出かけた人もある。サンチで暑氣にあたつた私はこのあとアジャンタ、エローラと不便な土地に向うので、半日部屋で休養することにした。

あとで公園に行った人の話を聞くと、その公園の下は水道の貯水池になっているとか。そこをおりて鳥葬をする場所の近くを通つたが、その前の大樹には、たかが一杯いて氣味が悪かつたといつておられた。

私は夕方の港の空氣を吸いたく、外へ出てみた。車の往來の激しい道路の向うは海。手すりに寄りかかつて、眼下にひろがる港の水の動きを見たり、湾を渡る風に吹かれたり、市中へ行かなくとも、これまた楽しいなど一人で、近くに見える水面を見下ろすかのように建てられたインド風の門を眺めたり、英國支配下にありし頃の、このボンベイの感傷にふけるのだった。

夕食はさすがにおいしかった。ミネラルウォーターもあることに気づいた。食事の途中から、中程にあるステージの前でダンスが始まつた。私達のテーブルの近くを通り抜けてはダンスに加わる一人のアメリカの婦人はダンスも上手。社交も上手。この人と、ふと目が合った時「お上手ですね。私楽しませて頂いてます」と、一言いうと、それから後は目くば

せしたり、手を軽くふったり。ボンベイの一夜は和やかに心たのしいものであつた。

アジャンタ

三月一日。五時四十分ホテルを出発。空港に到着する頃の明け方の空の美しいこと、二階の食堂でとる朝食も忘れ、暫くバルコニーから美しい空を、そしてその空へ飛び立つばかりのジェット機を眺めていた。私達の乗る飛行機は小型機。オーランガバードへ向け七時四十五分出発。アラビア海に背を向けて、デカン高原のオーランガバードへ着いたのは八時三十五分。車へ分乗し、グリーンブラベルホテルと名前はホテルらしいけど、田舎町のゲストハウスといった程度の宿につく。何と暑いのだろう。部屋へ入るとすぐ天井の扇風機を回した。

いよいよアジャンタへ向け車へ乗り込む。アジャンタへは約二時間もかかるとか。ランチをつみこみ、十時過ぎに出発。ここは回教王国であつたというだけあって、古い城下町、けれど町それ自体すでに遺跡化しつつあるマンゴの大樹の並木道を通り抜け、高原地帯にかかる。すれちがう女の人達は壺や籠を頭にのせ、腰で調子をとって歩いている。遠く近く丘の起伏の間の一本道をひた走りに走る。三台の車のあ

とにたつほこり。雨が少ない乾燥地帯の一本道は延々と続いている。地理で習って不思議と記憶に残っていたデカン高原を、今走っているのだ。

感慨無量である。西インドのガット山脈の石灰岩地帯にある石窟寺院は千二百以上もあるというが、この八十%は仏教関係といわれ、その中で特に世界的に名を知られているのが、今行こうとしているアジャンタなのだ。二時間近くも走ったであろうか、車は岩石地帯の丘で一休み。向う側の丘の中腹に洞穴が見える。あ、いくつもある。あれだ！ あれがアジャンタの洞窟。車は丘をおり、谷間の径を走る。曲折が多くなった。ぐっと岩山の角を回ると、今まで全然見えなかったバンガロー風の建物が見えてきた。切り立った岩山の谷間にあるバンガローの前には、土着民だらうか、人待ち気にしたまろしている。車を降りた私は目の前の崖道を疲れ切っておりて来る人を見た。遠くの丘の上から一望に見えた洞穴は、ここからは全然見えない。ヤレヤレここを登らなければ行かないのだ。この暑さで大丈夫かな？ 私達は、とにかくお昼をすますことにした。

バンガローの前にはおかげでないこしかけを、太い二本の棒でしばりつけ、四人でかつぐものが置かれてある。「かつ

ぎいす」とでもいうべきか。ちょっと心ひかれた私をみてとって、荒くれ男共が「ヘイヘイ」(のんなさいのんなさい)とすすめる。かつぎ代十六ルピーとのこと。一ルピー四十八円とすれば七百六十八円になる。暑さにはてしてしまうよりはと、乗ることにする。玉山夫人も年長者の主人も乗る組に加わった。

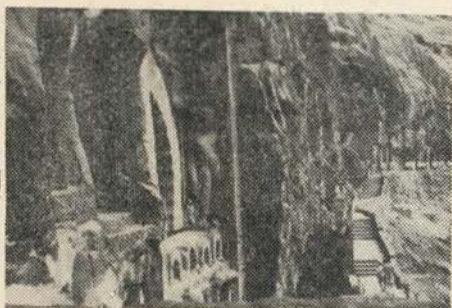
一番に、ひょいと腰かけてみた。次の瞬間、ぐいと持ち上げられてしまった。私自身、心の態勢もとのわないののに、四人の荒武者かつぎ屋さんは目の前の崖をかけ上り出した。全くアレヨアレヨというひまもない。いすの両手に思わず力が入る。径は直線で幾折もある。曲る所へ来ると、この四人は反対を向くのと、棒をかつぎ変るのと、登るのと同時である。乗っている私は、このまま向きを変えられる。えらいものに乗ってしまった。止めて！ともいえない。登り切ったなと思ったら、ドスンと地面におろされた。これで十六ルピー、何と高いのだらう！ 玉山夫人と顔を見合わせてしまった。暫くするとシンさんや若い方々が登って来られた。シンさんが拝観料をまとめて支払い、峡谷を見下しながら細い径を歩き出す。「ヘイヘイ」という声にふりむくと、あの荒くれかご屋さんが、乗れと手まねでいう。ああ、また乗せてくれ

るのだな。これからは、あんな急なこともないと安心して乗る。この径にそって洞窟がある。玉山さんと先になり後になりして、洞窟を見学して出てくると、また乗るといった調子で、結局高いとは思えなくなった。

第一洞窟から二十九窟まで、谷川にそっている岩山をほり、この各窟の中の壁面にそって、仏像や仏画が彫られてあるのだ。見学者が入ると、バツと照明を照して壁面をみせてくれる。幾世紀もかかったに違いない。素人の私には、只コ



小タジマハール



アジャンタの洞窟

ツコツと彫ったであろう当時の彫刻師のすばらしい技術に驚くばかりであった。一本の柱にしたって、自然の岩石を柱としてくり抜き、天井を彫っていくすべてが「彫りの技術」である。

珍らしく西洋人の一団に会う。イランに在住するドイツの婦人達であった。ことはも通じない東と西から来た外国人同士であるが、洞窟の前の石にこしかけ、写真を撮ったりして一休みする。



かつぎ椅子(アジャンタ)



エローラ

この中央の洞窟は、紀元前一世紀に彫りだし始めたという、一番古いもの。その左右に連る洞窟は五、六世紀までなかったといわれる。この川の水が生活にかかせぬものであったに違いない。この洞窟の周辺には、人々が住んでいたに違いない。ここを僧院として修行していた僧達も、水が枯れて住民が移動していくに従って、この僧達もここを去っていったのであろう。溶岩地帯を浸食したワゴラ川も、この川らしき跡を止めているに過ぎない。

またあのかつぎ屋さんが来て、乗れと指図する。もう腰かけのこつも分ったし、多少ゆとりも出てきた。降る時のことを考え、チップをあげるからゆっくりとたのんでみた。ゲラゲラ笑いながら、あの恐ろしかった崖道を、タッタッタとかけおりの四人にチップをねだられたのは当然である。箱根の山のかご屋の現代版である。日射病にならずにすんだことを思えば、多少のチップは仕方がない。あの「ヘイヘイ」の荒武者達で、私のアジャインタ日記は忘れられないものとなったしまった。

三時にバンガロー前を出発。再びデカン高原をドライブ。途中部落民のバザールを見る。道ばたに店をひろげて、穀類や雑貨品を売っている。私達を珍らしそうに寄ってくる人達

に、恐れをなしてシンさんのうしろについて、こわごわ歩く。こういう時、インド人のガイドがついていてくれるのは有難いもの。シンさんのおかげで、デカン高原の土着民族のバザールも歩くことができた。そして広い広い高原の美しい夕映えの空を、田園を十二分にたのしんでホテルに戻る。

七時四十五分夕食。蚊がいる。寝る時蚊とり線香をたいてベットに横になったものの、何と暑いのだらう。扇風機は夜中じゅう回してもおれず、窓をあけようとしたが、たてつけの悪いせいか全然あかない。寝苦しい夜である。

エローラ

三月二日。七時三十分起床。私は目ざめると戸をあけてベランダへ出た。朝の空気の冷くて、おいしいこと！寝苦しい暑い夜であったけれど、この涼しさ、快適である。

八時朝食。今日はオーランガバードの西北二九キロはなれた洞窟、エローラを見学に出発。町のはずれに回教の教会がある。道路の右側に十字架をたてた墓が並んでいる。回教の栄えた、このオーランガバードに、いつ頃キリスト教が入ったのだらう。

うっそうとした大樹の枝葉の茂る並木のトンネルを通り、ラガシ村にかかる。紙を作っていた村というが、人影も見え

ない静かさ。行く手にとりでが見えてきた。ラジャーランデイオが建設した城だそう。丘へさしかかる右手の崖下に水源地があった。南方にしか見られぬ火焰木の真赤な赤が咲いている。やはり水不足なのだろうか、エジプトのカイロで見たのと同じ、花の数がぐっと少い。

十時にエローラへ着いた。アジャンタへの道程と比べると、四分の一の距離しかない。アジャンタは峡谷にそって彫られた洞窟。ここエローラは大平原に起伏する岩山の一つに西に向って石窟が並んでいる。全部で三十四窟で、八世紀から十三世紀にかけてつくられたという。私達は十番目にあたる石窟から見学する。第十窟を下から見上げると、窓のならんだアパートみたいな二階建になっている。十二窟までが仏教窟で、その他はヒンドゥーとジャイナ教の石窟である。

十六号窟であつたらうか、中央に神殿のような櫓閣があり、左右は石柱をくり抜き、見上げるように高く何階ものアパートの窓のように幾つも並んでいる。中央の神殿は岩を切り開きながらつくられたものに違いない。

彫られた仏像といい、ジャイナ教の女神像といい、昔を語るアジャンタの洞窟、エローラの石窟を一部屋部屋見学して歩くには、一ヶ月も滞在しなくては見きれぬものではない。

エローラを十一時二十分に出発。中村先生の提案で町に近いオーランガバード石窟に寄る。デカン高原の起伏を一望に見渡せる丘の中腹に石窟がほられてゐる。三窟の中のひとつ、仏堂になっているところを見学。このあたりの丘に石窟が点々とあるらしい。切り立った崖の近くに立ち、デカン高原を眺めている私に土地のガイドが、飛拍子もなくこんな質問をした。「そのカメラいくらですか」。最も簡単に撮れる素人向きの小型カメラを手にとって、いかにもほしそうである。一万円だったか、はつきり覚えていなかったが、三十ドル位と答えると、のけぞるばかりに驚いて、とてもとても買えないという。果てしないデカン高原の壮大さに酔っていた私は、一瞬にしてインドの現実にもどされてしまう。

町へ降りる途中、小型タジマハールへ寄る。すべて小規模ではあるが、形、様式は同じに設計されている。この土地の栄えた頃、領主が造らせたものであろうか。回教都市としての昔を語るものである。

ホテルへ戻り、おひるをすませ三時に出発。三時半の飛行機でボンベイへ戻り、ここで他の飛行機に乗換え六時十分発。今度の旅行中の最南端のナーガルジュナコンダ、竜樹菩薩の遺跡を拝観すべく、ハイデラバードへと向う。

『選択集に聞く』を読んで



東京深川長専院住
正本 乗光

選択集というまでもなく、法然上人が選択本願念仏の趣旨を明らかにされたもので、浄土宗開宗宣言の書とも称せられ、いわば浄土宗信仰の原点たる位置におかれるべきものである。

本書は高名な宗教心理学者である竹中信常氏が、学者としてではなく、一人の求道者として、この選択集から「聴き」（聞き）、感じ自身の内面に語りかけるところを綴ったものだと言われている。

著者は、この「聞く」という事に関して、第一章「『えらび』にいたるまで」の冒頭に、仏伝と聖書のマタイ伝を引用して、仏教に於てもキリスト教に於ても、説法に際して「耳ある者は聞け」という同様の宣言が為されて

いる点を指摘し、宗教に於て「聞く」という行為がいかに大切であるか、つまり信仰を確立する為には「聞える」のを待つのではなく、自から心をかたむけて「聞く」という態度が必要である事を、第一に説いている。そして本書の執筆にあたって、著者が選択集に立ち向った態度がそこに立脚しているのだという事を明らかにしている。

また、この章では、「誰が」、「いつ」、「どうして」というテーマに従って、法然上人の人となり、選択集が書かれた頃の時代的背景、選述に至るまでの経緯等が、極めて平易に、しかも適格にポイントをつかんで説明されている。

次に第二章「選択集について」では、文献

学的に、諸本及び引用された文献、科文を簡単に説明し、第一章と併わせて、本論に入る為の準備段階と為している。

第三章以降は、本論としての性格が与えられているが、ここに於て著者は必ずしも選択集の全文を対象にしているのではなく、著者が自身と選択集との対決に於て重要なポイントとみなした箇所、著者流に言えば「特に耳に適した箇所」について聞くとところで、多少の省略が為されている。また、そのスタイルは、重要な項目ごとに漢文の本文とその書き下しを挙げ、懇切な補足説明を含んだ大意を附し、次に著者がそれをどの様に聞き、如何に理解して心に刻み込んだかを、「私聞」という形で述べてゆく。

この「私聞」を見たとき、著者の「聞く耳」の鋭さというものを感ぜざるを得ない。一例を挙げれば、念仏信仰の決定的条件ともいえるべき三心について、著者は専門の宗教心理学の分野から、深層心理学的方法によって分析を試み、その結果、念仏信仰は人間の本性に共通する心理的基盤にもとづくもので、全人類の宗教たる条件を備えているのだという事

を明らかにしている。この様な着眼の仕方は、竹中氏によってのみ出来るのだと言っても過言ではないであろう。

さて、本来なら、ここで本書の内容の要約を為さねばならない所であろうが、私の如き浅学の者がそれをするのは僭越であるばかりでなく、読み方の悪さから、著者の意図を誤解している点も多分にあるであろうから、私が本書から「聞いて」感じた所を記すにとどめたい。

著者は巻頭の序に於て、「わたしと『選択本願念仏集』との出会いは、運命論的な表現をすれば、わたしが浄土宗の寺にうまれた、そのときにあつたといえよう。浄土宗徒に課せられた信仰責任は選択集理解が第一義とされ、わたしはいつかは選択集に立ちむかわねばならぬことを、出生に於て義務づけられていたのである。——」と述べている。この論法を用いるまでもなく、浄土宗の寺に生れ育った私も、いつかは選択集に立ち向わねばならない義務を背負っている事になるのであるが、今までそれに接したのは宗乗の講義に於てだけで、その限りでは、勿体ない話ではあ

るが、正直な所、それはいわゆる二祖三代の伝統的教學上の解釈でしかなく、そうでない場合でも有難話しの域を脱せず、二十世紀という時に生きている私の胸にヒシヒシと迫ってくるものは余り感じなかった。これは私が「聞く」という態度でそれに接しなかったからであり、従つて、自分自身の信仰の問題として選択集に立ち向つたとはいえないのである。ところが、今回本書に接して、はじめて選択集が活きた言葉として私に迫つて来た様な気がする。

法然上人は選択集に於て、凡入報土を実現するという観点から、徹底した選択を行つてゐる。つまり、末法という時に生れ合わせ、信仰能力（竹中氏はこれを機としている）にも劣る凡夫が救われる道を見出す為に、必要でないものを惜しげもなく捨て去り、従来の仏教信仰に於て最も大切とされた菩提心までも、確固たる信念のもとになげ出してしまつたのである。そして最後に残されたのが口称念仏の法門である。つまり、選択の結果たつた一つ選択されたのが念仏なのであつて、我々はただそれに従つて念仏を唱えさえすれ

ば良いのである。だがしかし、本書によって教えられる事は、そこで、その念仏をもう一度、今度は自分自身で選択しなおしてみなければならぬという事である。何故なら、信仰とは全く個人にかかわる問題であり、それを問題にするときには、自分自身の内面への問いかけという形で、それと立ち向わなければ、本当の信仰も、従つて安心も得る事が出来ないからである。本書で著者がとつた態度、即ち「選択集に聞く」という態度も、それに基づいているのである。そしてそれは、とりもなおさず、選択集の選述に際して法然上人がとられた態度でもあつたと考えられるのである。私は本書によって「聞く」事の重要性と求道の態度というものを改めて教えられた次第である。

こんな形でしか本書を評価し得ない私の非才を、ただ恥じ入るばかりであるが、多くの人が本書に接し、御自分自身の「耳」で選択集から何ものかを「聞き」出されん事を希望する。

『選択集に聞く』

竹中信常著

発行所 教育新潮社 価千円

ふる里紀行

拝啓前文御免下さい

先日御手紙頂きまして、そちら様の実情把握致しました感があり、一部島国根性とも云う可く、又人の成功を怨む人々のしがなさを唯々なげくばかりであります。

尊諭拝見致しまして、恰も旧宗時代に横行していましたボスの型がまだ残っているらしく思えて実に残念に存じます。(中略)

尊台今回の件につきましては、先便にも申しました通り、情を離れた純理に稍々別の色が混っている様な格好で、尊台が組長と談合せられたにもかかわらず、又格別に私等の取ったことに理由を置きかえての処置、実に遺憾に存じます。

純真な日和山君の相に心ひかれながら、とうとう本日午後要偈もすみ、明朝は正伝法であります。今日夕刻本人を呼び入れまして、次の如く申しましたから、右御了承願います。

『本日まで君は如法にやって来てくれた、そして愈々明日は伝法である。それについては君は御師僧様と教務所長との間のお話を聞いていると思うが、君には可愛想だが、今教区内の平和のため、御師僧様と所長の間を今より以上激化して頂く事は実に困るので、組長

念仏村の ののさまの死

《新潟県佐渡水津湊》

——小千谷市照専寺住職——

川 端 大 祐

からも御師僧に隠忍して頂く様願う積りであるとのことでもあり、又君の御師僧様からも小生に先日のお手紙で、場合によっては検定試験の結果も加行も結果的に保留して頂いてもよいと申して来られる。この御師僧様の御言葉は本当に血の出る思いのお言葉で、喜んで君が京都から帰えるのを待っておられる気持の表裏、本当にお察しなくさめる言葉もない。

而し時が時、折角君のやった検定試験や、加行の両者共、必ず小生等は此のまま死なしてしまわぬつもりであるから、一時、現在だけ、がまんして帰ってもらいたい。勿論明日の正伝法の作法は他の人とも一緒にやって頂くのだが、頂いた巻物は持って帰らずに私にあづけて頂きたい。そして帰ってからは御師僧様に私たちの気持を

伝えて頂き、君も落たんせずに御師僧様に今迄のようによく仕えて呉れ玉へ、

と申入れましたところ、本人もよく納得してくれた様です。

来春宗会に所長も来られまして問題になると思いますが、その時は小生も強い信念を持っております。唯万事尊意に添い得ません事実に申訳ないと存じます。何卒此の辺御諒恕願上げます。

上野部長よりも御消息申上げておると思いますが、幸便に托^{たく}しまして小生の意中申上げます。

小生も教務所長をやりましたが、人權の尊重は絶対的のものと考えます。事務処理者として故意に妨害する如き権限はありません。

殊に所長は事務処置の地方責任者で職務以外の資格賦与者ではありません。殊に書類に於てはその進達の責任があり、書類の備不の指摘と匡正をする個人の味方であると愚考してやってきました。尊翰末尾にありました御意見小生も同感であります。(後略)

昭和二十五年十一月廿四日 田中興哉

広島 教信様

長い私信で貴重な紙面をふさいでまことに恐縮であるが、当時の本山宗務の重役の温い処置と、地方寺の子弟教育、資質の問題、後継者、檀信徒の信仰実態等を知る為に、この手紙の前後を説明することから、わがふる里「念仏村」を語ら

ねばならない。

田中興哉師は当時の知恩院学事課長、後七百五十年遠忌局長をつとめられた方であり、之中、上野部長とは上野忠誼師である。

話は二十五年の昔敗戦直後にさかのぼる。

私が南方から復員した頃の師籍小千谷照専寺は農地解放のため、寺内は老師夫妻と身体障害の伴僧と老婢の四人で途方に暮れていた。

三百俵近い年貢米に支えられていた大寺が一夜にして乞食生活に転落したのであるから老師もあわてざるを得なかった。

弟子等も戦死一、未婚還者三、闇屋に転業、或は還俗した者三等で寺内は老人ばかりで閑散として荒れ果てていた。

インフレは次第にすさまじく、農地に依存していた寺院は因果のことながらまことにみじめなものであった。

こうした時代に、農村では塩の窮乏がはげしかったので、闇米の代替物資として私は生れ故郷の佐渡の海岸へ塩炊きに出かけ、隣家の多少知恵おくれではあるが、至極真面目な仏さまのような日和山幸吉青年と知り合って、出家得度させることに本人親戚等と相談して師僧に依頼したのであった。

教区長と師僧との争論をまつまでもなく、寺の庭はき程度なら兎も角、人師僧侶としてはどうか、世間一般には通じない大きな疑問であつた。

私も自分が僧籍にあり、法を説く身であれば知恵おくれの足の悪い幸吉青年と同列に村人に思われることに、いささか抵抗はあつたが、ひるがえつて、仏眼に照らせば私も彼も、学問においても知慧道業においても、五十歩百歩ではないか、人徳においてはむしろ天真爛漫な彼の本領にはかなわないと感ずるものがあつた。

幸吉君の幸信沙弥は、今は若者不在の荒れ果てた寺内で毎日懸命に掃除にはげみ、あやぶまれた誦経も精魂をかたむけた師弟の努力が実のつて、三年後には日常勤行は勿論、阿弥陀経も暗唱誦誦しうる域に達した。

特に掃除は「一、掃除、二、勤行」との師の教えに従つて、「今迄のどの弟子よりも幸信の掃除が一番ちや」と師僧は目を細めるほどになった。「幸信さん、念仏は有難いかの」とからかう人があつても「となえろと有難いもんですちや」と佐渡弁で真面目に答えるようになった。

その頃前住職が戦死して無住になつていたふる里水津村誓願寺の後継問題が起つたのである。

佐渡浄土宗十三ヶ寺中でも寺格の低い寺ではあるが、部落五十戸全部檀中であり、すべての行事が念仏中心で住職を守つて行われるので、収入は少くとも寺は聖域として存在意義は高く、兼務を欲する者も少くなかつた。

三代前明治の末年師籍照專寺からこの寺に晋山した漆章道師も幸信沙弥に似た「尼入道の無知のともがら」を地でゆく善人であつて、ののさまとして私ども幼少年の無二の友だちであつた。

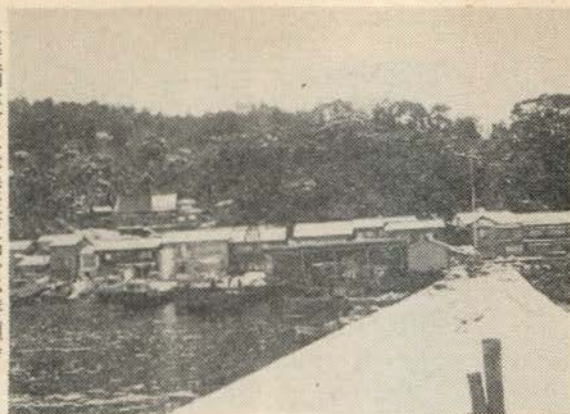
経済的に恵まれないこの寺に、たとえ名僧知識を迎えても、一年とは留まらないであらう。

幸信沙弥は幼時小兒麻痺を患を患い、左足少々不自由、知慧若干おくれであつたが、真面目、柔和、人を憎み怨むことを知らぬ妙好人であれば、この寺の住職としては申し分なしと村議一決して、教師補検定を申出、加行することになったのである。

而し正規には一宗の教師住職としての資格検定にはきびしい条件のあることは必定である。たとえ教師補たりとも一山の住職として宗侶の品位にかかわること故、本山宗務に異義のあることは当然であつた。

師僧は釈迦の弟子周利槃特しゅりはんとくの例を引き、元祖大師の一枚起

請文に準じて、幸信沙弥の加行入道を要路に力説して遂に納得してもらったが、地元教区組内で猛烈に反対する者があって、前文の様な情宜こまやかな当局の慰問文が交わされたのであった。



佐渡両津市水津湊左方高台が誓願寺

当時の教区教務所長の進達の中には所長奥書を添附せず、書類手続きの不備をなじり、次の二点をもつて

本山、宗務に対して抗議が申込まれて広島師範は苦境に立たせられた。

1、検定允可願の教区証明は誰がしたか。

2、検定について予め師僧に教区教務所よ

り自重方申込れたるに、この度の受検は執事長の顔によるものにあらずや、

こうして知慧おくれ片足不自由、風彩の上らぬ幸信沙弥の住職の道はとざされたのであったが、間もなく、この教務所長も遷化され、村民一同の熱意は教区、組内一部ボスの妨害を排し、更に五年間の師籍の勤めも終り、田中上野両上人等のご好意に恵まれて幸信和尚は、晴れて生れ在所の誓願寺に晋山しえたのであった。村人に愛され、やがてよき内助者も得て寺内はいつも春風駘蕩、和尚は念仏三昧の生活であったが不幸昭和四十三年春、胃がんの症状すでに末期となっていた。医師の潰瘍との知らせに何の疑いももたず、快復を信じてひたすら念仏を続けた。ためか医師の見込みより一年有余生きのびたのも疑うことを知らぬ上人の心境からであろうか。「みんな阿弥陀さまのおかげです」と臨終まで笑みをうかべての大往生であったと云うことである。昭和四十四年六月三日行年四十二歳の若い生涯を閉じた。

法名 堅蓮社正誓幸信和尚

盛大なとむらいが行われた。全村民三百、佐渡浄土宗十ヶ寺、近隣各宗寺院五ヶ寺、村出身の僧侶六名の念仏高唱の中で、凡夫往生の典型的葬送の盛儀が行われた。

寒村ながら、遺族の保証に檀中は今も心をくだき、未亡人は坊を守って読経修業に涙ぐましい献身を続けている。

正月四日は恒例の村民全員の『漁づけ念仏』が寺で行われる。この村の全村別時は鉦と太鼓で活気にみちたものであるが、この漁づけ念仏は、特に一年の豊漁を祈念するもので勇壮そのものである。

寒に入ると一月二十五日の元祖大師忌を中心として、五十戸の村を南北二組に分けて、『夜廻り念仏』講が立つ。各家輪番に宿の世話をする。別時が終ると熱い茶粥ちやがゆの夜食を樂しみながら大漁の話、作物の話、珍談、奇談、旅の失敗談などに打ち興ずる。

毎月二十五日の元祖大師講は各戸必ず一人は寺に参集して別時を営む規定であったが、現在では老人等の楽しい憩いの日となっている。

正月十四日には『押し念仏』と称して、成年に達した青年の「若衆入り」を祝う裸念仏踊りがもようされる。ユーモアな老女等の「にわかおどり」なども披露されるのはこの時であった。而し近來は若者の都会流出で、かつての成年式裸踊押念仏も絶えたえの模様である。

大漁の時も、野休み（田植、稲刈り休）の時も、村中誓願

寺に上って鉦と太鼓の歡喜踊躍の別時念仏が催される。

不幸があれば通夜には全村その家に集って別時念仏を修行する。

十月十四日の十夜法要の行事は農閑期でもあり、子供等にとっても余興もあって、楽しい念仏行事であった。

老婆等は村出身の僧侶等の誰かが帰省すると寺に集って、「なんか、おはなし、してくれんし」とせがむ。法話を始めると、こっくりこっくりを始める、それでも念仏の声は絶えないのである。

この部落の人達は一枚起請文の読誦と念仏に終始して「念仏為本」だの「信心為本」のと法談宗論をたたかわした例なまひがない。いかなる名僧知識の法話よりも章道和尚や幸信和尚の無邪気な念仏と読経で村人は救われたのであった。

幸信和尚の葬儀にふる里を久々に訪れて、私はなつかしい全村別時念仏の盛儀に列した。荒波にきたえた漁師等の力強い称名合唱の中で、正伝法の巻物を手にして帰郷出来なかった二十年前の幸信和尚のあの悲しい胸中を想って、とめどなく涙したことであった。

（註） 水津村字水津湊は現在両津市に合併されたが中心部より十六キロ、バス一時間の辺境にある。

二尊院への道

高橋良和



京都の名所は、このごろいつの季節でも人が訪れるようになった。そのなかでも八瀬、大原、それに嵐山などは、昔は桜か、紅葉のころだけであったのに、このごろは、元旦から、年のくれの大晦日まで訪れる人があるのはよほど暇があるのか、金があるのか、それとも古美術、古文化を愛好する人が増えたのか、京都に住んでいるわたしには、一向に合点がいかなることである。ここ当分はこの傾向がつづきそうである。

洛西というのは、京都の西の方である。その嵯峨に名刹二尊院がある。

戦争中も、戦後もこの寺を訪れる人が少なく淋しかったが、今の住職の羽生田敦純さんの努力ですっかり寺観は一新し、今はそのお堂も修理が出来たし、境内も美しく整備されて、名刹としての格式をもった寺になっている。

この寺は天台宗であって、その開創は慈覚大師であるといわれている。この付近には、名高い落柿舎があり、二尊院の前を通過して、落柿舎へ行く道は、奥嵯峨のおちついた雰囲気をつたえているが、日曜日などは、まるで銀座や、新宿の雑踏を思わすほどで、「柿好しや木すえは近きあらしやま」の去来の句を味わうにはほど遠い混雑の様相を呈する。

この寺は鎌倉時代まで久しく荒廃していたのを、法然上人の弟子である正信房湛空によって再興されたとつたえられている。

この湛空は、この二尊院の中興開山であり、土御門、後嵯峨両天皇の戒師となった人で、建長五年（一二五三）にこの寺で亡くなっているが、年は七十八歳ということである。この湛空の墓は、本堂の右側の段々をのぼった小倉山中腹にあり、まことに小じんまりとした墓である。

ここで興味あるのは、二尊院というこの寺の名である。二尊というのは、昔から釈尊



と、阿弥陀如来の御二方であるが、浄土宗で行なう五重相伝のときの話にある、二河白道は火と水の河のなかの一本の白道をむ行者にお釈迦さまのうしろから、前かも阿弥陀さまが迎えてくだされるということになっている。これを発遣（はつけん）の釈迦、来迎の弥陀と称している。ところが、この二尊院の御本尊は、お釈迦さまと、阿弥陀さまの御二方を本尊としている珍らしいもので、全くその名の通り二尊院である。ところでこの寺に重文の法然上人足曳（あしびき）御影というのがある。

それは法然上人に帰依した九条兼実公が法然上人に、あなたのお姿をなんとか絵にして残しておきたいと、法然上人にたのまれた際に、法然上人は自分のような愚僧の姿を、兼実公のような御立派な方の持仏堂に安置されてはもったいないと固く辞退されたのである。

それで九条兼実公は、やむなく法然上人を自宅に迎えたときに、わざわざ浴室に案内をして、風呂からあがられたときに衣を着され、念仏される姿を画くようにということで、上人が風呂から出られたところ、絵師託間法眼が、ひそかに簾中よりのぞきみて画いたところ、どうしたことか、法然上人の足が衣の外にあらわれていたのでそれをそのまま画いたのである。

それから何日かすぎてしまったときである。法然上人が兼実公の邸宅に赴かれたとき、上人さま、あなたのお姿を画かせましたので、開眼供養していただきたい。

と兼実公が例の足のすこし出ている法然上人の御影を出して、上人にごらんにといたと、法然上人は、

これはまことに無作法な姿である。



とおっしゃって、その前で念仏されるとその足がひっ込んで、正しく坐っていらっしやる上人像になったという伝説がこの足曳御影である。

おもしろい伝説である。

多少剝落しているが、まことに重文にふさわしい絵像である。

この寺にはまた七箇条制誡が残っている。いわゆる念仏禁止について、七箇条の制誡を定めて、門弟一同にそれを守ることを約束されたのがそれであるが、元久元年十一月七日（一二〇四）に門弟がこの二尊院に集まっている。そして、この文章は法蓮房信空が書いたということである。そのなかには、

○無学の分際で、天台真言などの宗旨のことを誹ってはならぬ。

○他宗の人と宗論してはならぬ。

○信仰がちがうからといって、それをやめよといったり、嗤てはいけない。

○念仏門には戒律や行がないといって、不良の行為をしてはならない。

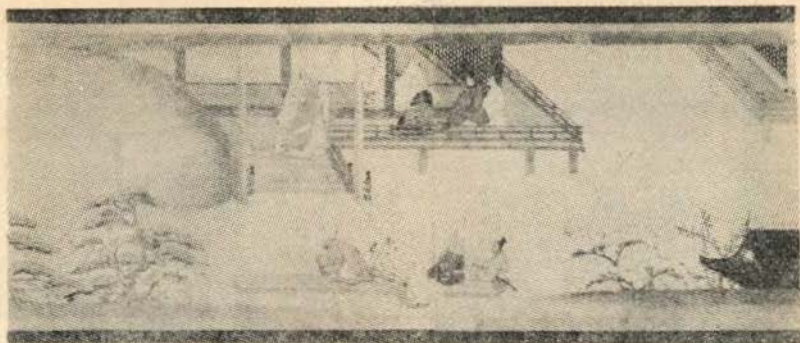
○お経に説いていないことや、師匠もいわないことを云ってはならぬ。

○愚かであるのに人の上に立って指導してはならぬ。

○邪説をいいながら正しいおしえといったり、師の説であるといってはならぬ。

とあり最初に、「あまねく予の門人念仏の上人等につぐ」とある。そしてあとに八十八人の名をつらねて、比叡山の真性座主に送ったのである。

その大会議の場所がこの二尊院であるから浄土宗史の上からも重要な寺である。



法然房源空清涼寺参籠の図

——法然上人行状絵図——卷四

ある先学が、「青年の姿は貴い、そこには無限の可能性があるからだ」と口癖のようにいわれる。けれど青年にしてみればそうは考えない。あれも欲しい、これも欲しい、あれもしたい、そう思っているのに相違ないと思う。

保元元年（一一五六）三月、二十四歳の青年僧法然は比叡山を下った。それというのも、皇円に師従し修学をしていたけれど、西塔黒谷の慈眼房叡空の門に入ってから六年目のことである。その間「悟り」を目的として求法したけれど果せなかったのである。もともと経る日々を青年僧法然はどのように受け止めていたのだろうか。叡山を下り見識を広めることに解決の道を求められたのかも知れない。まず最初に嵯峨の清涼寺に七日間参籠されたのである。勅伝には「求法の一事を祈請のためなりけり」とある。

この像は昭和四十三年十月八日開眼されたもので、今里龍生氏の制作になっている。二二〇センチ、三三二キロからなるブロンズである。瞑黙祈念された法然の気高さが良く表現できている。組指の誓願印は、同寺境内で像の前に跪す者にとつて求道に迷う大きなものと力強さを重くるしいほどに感じさせられる。法然の青年期の像は少ない。その中であって、こうしたお顔を製られるまでの作者の苦勞も合せ考えられる。

源平の合戦が酣むの時、嵯峨から南都へ、法相の藏俊・醍醐の寛雅・華嚴の慶雅・中川の実範などの教えを乞われたのである。清涼寺の釈迦像は釈尊三七歳の時の説法像であると伝えられる。勅伝にもみえるように大衆と共に謙虚に参籠されている姿は、山を下りられた時を寂しさとするなら、誓願印の厳しさといえよう。

法然上人の御影像をたずねて



求道青年像

法然上人二十四才——京都清涼寺

「浄土」購読規定

一部 定価 九十円

会費一カ年金一、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和四十六年三月二十五日印刷
昭和四十六年四月一日発行

定価 九十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十二ノ六

発行人 法然上人顕仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二二八七番

東京都港区芝公園十九号地の一

浄土宗務支所内

編集室 法然上人顕仰会

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可
昭和四十六年三月二十五日印刷
昭和四十六年四月一日発行
(毎月一回一日発行)

《前田聰瑞・大野法道・中村弁康編》 本会発行

碩学
の名著 『浄土宗読本』 覆刻版

価 1000 円 〒 150 円

時代を越えて浄土宗の真髓を平易に説いた不朽の入門書を浄土開宗八百年を期して世に贈る。浄土信仰の意味と価値・法然上人の念仏の教えを日常生活に実現する仕方・仏教徒としての心得等々。この一冊あれば浄土宗は勿論仏教のすべてがよくわかる無類の名著。

竹 中 信 常 著

新刊 『選択集に聞く』 B5判・308頁
価1000円・〒150円

発行所 教育新潮社

著者長年の選択本願念仏集の研究・既刊の解説書の集大成、選択集を現代に贈る平易な文面、浄土宗徒必携の好書。

浄 土 ト ラ ク ト

新刊 『浄土宗のおつとめ』 村瀬秀雄著

B6判 本文16頁 価 50 円 百部以上 45 円 〒 25 円

各々御用のむきは早目に本会へ申込み下さい。

東京都千代田区飯田橋1-1-16

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (03) 262-5944 番

浄
土

第
三
十
七
卷

第
四
号

定価金九十円(送料
六円)